

Title	日本語物語テキストにおける思考と発話
Author(s)	上田, 恭寿
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47167">https://hdl.handle.net/11094/47167</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	うえ だ やす ひさ 上 田 恭 寿
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学位記番号	第 2 1 2 8 8 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	日本語物語テキストにおける思考と発話
論文審査委員	（主査） 教 授 津久井定雄 （副査） 教 授 北村 卓 助教授 小口 一郎

### 論 文 内 容 の 要 旨

日本語物語テキストに物語世界の情報を聞き手に伝達する「語り手」と、物語世界の作中人物の存在を認め、また、日本語物語テキストに、思考と思考を表出する発話を認めると、一般的には、日本語物語テキストにおける思考を行う主体（思考主体）と思考を発話表出する主体（発話主体）は、語り手と作中人物との間で一義的に決定される（地の文と草子地は、語り手の思考が語りの発話によって表出されたテキスト、会話文や心内文は、語り手の思考が語り手の発話によって表出されたテキスト）。ところが、古典物語テキスト、とりわけ、『源氏物語』テキストには、語り手と作中人物との間で、主体の不確定性、あるいは、一文中での2主体間の移行が観察されることが古くから指摘されている（この現象を「不確定・移行現象」と呼ぶ）。ただし、この現象が近・現代小説テキストに観察されるといふ指摘はこれまでになかった。しかし、次の現代小説テキストの、例えば、9)のテキストには、この現象が観察される。これは、主人公のおもんが道で元の夫の「辰蔵」に会って、新しい嫁をもらおうという話を聞かされ、街を歩きながら色々と葛藤する様子が描かれている場面である。

- 1)歩いているうちに、おもんの眼に涙がにじんできた。
- 2)——あの、うすらバカ。
- 3)胸の中で、辰蔵を罵った。4)なにも新しい嫁をもらうからと、ことわりを言うことはないじゃないか。5)どうもこいつも、あたしをバカにしやがって。
- 6)おもんは興奮して、人をかきわけるようにして道をいそいだ。7)しかし辰蔵は、嫁をもらう前に、もう一度あたしの気持ちをたしかめたいと思ったのかも知れない、と気づいたのは、橋を渡り切って、米沢町の町並みに入ってからだった。
- 8)だが、そう気づいても、それは何の慰めにもならなかった。9)気持をたしかめるといったって、たとえばそのうちもどりたいと思っているなどと言え、辰蔵は卒倒もしかねない男なのだ。（藤沢周平『遅いしあわせ』）

9)の発話主体については、始まりの「たしかめるといったって」という口調は、例えば、2)や4)や5)にあるおもんの口調との共通性が認められ、おもんの発話と判断することができる。語り手の発話だと、例えば、「たしかめるといっても」とある方が自然である。ところが、最後にある「卒倒もしかねない男なのだ」というのは、どちらかとい

うと語り手の口調（発話）とする方がふさわしい。おもんの発話だと、例えば、「卒倒もしかねない男だからね」とか「卒倒もしかねない男なんだよ」といった口調の方がふさわしいからである。つまり、発話は、「気持をたしかめるといったって」と、おもんの発話で始まり、それが終わりには「卒倒もしかねない男なのだ」という語り手の発話に移行している可能性を認めることができる。また、9)の思考主体については、おもんの思考の表出とすることも可能であるが、語り手による辰蔵に対する評価（思考）の表出とすることもできる。9)にはこのように、語り手と作中人物との間で、思考主体の不確定性と一文中での発話主体の移行が観察される。

本論は、日本語物語テキストにおける「不確定・移行現象」を取り上げ、この現象の現出様態を検証し（本論第1部）、そして、日本語物語テキスト生成の見地からこの現象の現出を考察し、日本語物語テキストの特性を抽出すること（本論第2部）を目的とする。

取り組み方法としては、第1部では、「物語テキストは発話による思考の表出である」という基本原理を立て、物語テキストの構成要素として思考と発話の2要素を設定し、それらの主体、即ち、思考主体と発話主体の分析を行う（「2主体分析」と呼ぶ）。ここでは、従来より「不確定・移行現象」の観察が指摘されている『源氏物語』テキストと、そのような現象が指摘されることがない現代小説テキスト（藤沢周平テキスト）を分析対象として「2主体分析」を行う。

また、第2部では、物語構造についての先行研究を踏まえ、主に Leech と Short による小説構造を参考にして<sup>1</sup>、次のようなディスコースレベルの階層性による物語構造を設定し（「階層構造モデル」と呼ぶ）、この物語構造に基づいて、「不確定・移行現象」の現出を物語テキスト生成の見地から考察する。

#### 「階層構造モデル」

ディスコースレベル		世界
実際の作者	— 実際の読者	
含意された作者	— 含意された読者	
語り手	— 聞き手	表現世界
作中人物	— 作中人物	物語世界

図で、「含意された作者」は、「実際の作者」になり代わって「表現世界」と「物語世界」を統括し、物語作品についての文学情報や自身の文学的意図を「含意された読者」に伝達する。「語り手」は、「表現世界」において、「物語世界」の情報を「聞き手」に伝達し、また、「作中人物」は「物語世界」内で情報をやり取りする。「作中人物」と「聞き手」の間のディスコース上での語り手による発話が物語テキストである。

その結果、第1部では、現代小説テキストにも、今まで指摘されることがなかった、『源氏物語』テキストと同様の「不確定・移行現象」が観察されることを明らかにした。そして、『源氏物語』テキストと藤沢周平テキストの分析内容を対照し、「不確定・移行現象」の現出要因として、日本語の文法上の特徴（人称の使用や時制の一致の制約のないこと、あるいは述語が最後に来るという語順）を抽出し、さらに、両者に共通して観察される「不確定・移行現象」のうち、「主体の移行現象」に、語り手が取り込まれた特質が認められることを考察した。

第2部では、「階層構造モデル」と物語テキストにおける思考と発話の2要素に立脚して、次に示す、語り手の振る舞いとしての日本語物語テキスト生成過程を導き出した。

日本語物語テキストは、語り手の思考、または作中人物の思考が、語り手によって、語り手の発話で、または作中人物の発話様態を用いて発話表出され、生成される。

<sup>1</sup> Leech Geoffrey N. and Short Michael H. (1981) *Style in Fiction*. London : Longman House.

(本論では日本語訳による：リーチ、ジェフリー、N./ショート、マイケル、H. (2003) 『小説の文体』、笈壽夫監修、研究社)

この日本語物語テキストの生成の見地に立つと、「不確定・移行現象」における主体の不確定性は、語り手による、語り手と作中人物の間の思考と発話の選択の不確定性として、また、一文中の主体の移行は、語り手による主体選択の移行と捉えることができる。ここから、「語り手は、語りの部分部分で、語り手自身と作中人物の2主体の間で、思考と発話を選択しながら語りを進める」という、日本語物語テキストの特性を抽出することができる。この特性を「語り手の主体選択」と呼ぶ。

さらに、この日本語物語テキストの生成過程に従って、物語テキストの思考主体と発話主体に注目して、日本語物語テキストを8タイプに分類した。そして、その分類を通して、語り手の発話位置に関して、「語り手は、発話位置として、『階層構造モデル』における『表現世界』位置と『物語世界』位置を取る」という、もう1つの日本語物語テキストの特性を抽出した。この特性を「語り手の発話位置選択」と呼ぶ。「語り手の発話位置選択」については、語り手の発話位置と述語形式との関係を吟味して、「物語世界の出来事を叙述する述語形式は、語り手の発話が、『表現世界』で行われているのか『物語世界』で行われているのかを、それ単独では決定しない」という結論を得、述語形式の観点からもこの特性を検証した。

また、従来、日本語の自由間接言説、またはそれに相当すると指摘されているテキストと、本論において分類された、テキストタイプの1つである、「作中人物の思考が語り手の発話によって表出されるテキストタイプ」（本論では、「Cタイプテキスト」と分類）との間の関係を検討し、日本語の自由間接言説、またはそれに相当すると指摘されているテキストが、本論における「Cタイプテキスト」の下位分類タイプに位置づけられることを確認し、結果的にそれらを日本語物語テキスト生成の見地から捉え直した。

最後に、物語構造を露呈させるメタ物語構造性を示す、『和泉式部日記』と太宰治作品である『魚服記』の2作品を取り上げ、それらの分析を通して、日本語物語テキストの背景としての「階層構造モデル」を検証した。『和泉式部日記』では、日本語物語テキストの特性である、「語り手の主体選択」が引き金となって「階層構造モデル」が崩壊すること、また、『魚服記』では「階層構造モデル」における、ディスコースレベルの階層関係を見直すことによって、物語世界の出来事とテキストの発話時点の間に見られる時間関係の不整合性が合理化されることを分析した。

本論は、日本語物語テキストについて、今まで提出されたことがない、新しい知見を提出したものであるが、本論の意義は次の点にあると考える。

- 1) 従来の日本語テキスト研究においては、物語テキストの構成要素として発話要素が取り上げられることはなく（思考要素は、従来の研究で多く用いられる「視点」に相当する）、本研究の第1部で行った「2主体分析」は、物語テキストに思考と発話という構成要素を設定した、新しい物語テキストの分析方法である。
- 2) 第2部で行った、物語テキストにおける思考と発話の2要素と「階層構造モデル」に立脚して、物語テキスト生成の見地からの日本語物語テキストの取り組みも、従来行われたことがない、新しい取り組み方法である。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語物語テキストの特性に関して一般的な理論を立て、それを中古文学と現代文学のテキストに適用して有効性を実証し、次に日本語物語テキストの類型分類へと発展させ、さらに独自の階層構造モデルによって物語テキストの生成を論じたものである。

主要な方法は、〈語り手/作中人物〉の2主体と〈思考/発話〉の2要素を組み合わせることにある。『源氏物語』テキストにおける主体の不分明さと一文中で主体の移行という現象とを指して「渡り」「移り詞」「第4人称」などの術語がこれまでに用いられてきたが、本論文は、じつはこれらは〈思考〉のみに着目したものであると断じ、「給ふ」（古典テキストにおいて）や口調（現代文学において）などをマーカーとする発話要素を加えることによって、日本語物語テキストの精密な分析を試みる。包括的な理論を立てて、次にその有効性を実証するというのが論文全体の方法であるが、おおむね成功しているといえる。

2主体・2要素に基づく日本語物語テキストの4分類という理論の意義を、その応用例によって示すならば、「作中人物の思考を語り手が発話する」という類型（論文ではCタイプ）を「伝達節のない間接話法による言説である」

と言い換えることによって話法への関連づけを行い、逆に直接話法と間接話法の引用部のタイプをこの4分類への関連づけによって説明し、自由間接話法をCタイプの下位分類に位置づけている。このようにこの理論には大変生産的な面がある。

階層構造モデルにおいては最下層が物語世界であり、その上に表現世界（語り手-聞き手）が位置づけられる。表現世界の語り手が物語世界に対して、その2主体（語り手自身と作中人物）の間の選択を連続的に行うという形で関与することから、主体の不確定性と移行現象が生じるとする。この理論は興味深いものではあるが、〈語り手〉に関してはいっそうの考察の余地があろう。しかしながら、この階層構造モデルを『和泉式部日記』に適用することによって、論者は、作品のメタ構造的分析の興味深い実例を示すのに成功している。また、表現世界の語り手が物語世界に関与する際の位置どりという観点から行う、太宰治『魚服記』の謎めいたプロットの解釈も、作品の読みに新たな方法を提示するものとなっている。

本論文は、表現と考察にやや精粗がみられるものの、独創的な理論を徹底的に検証して意義のある成果を収めたものであり、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。